

可視化で捉えるまちの変化

～市内初の鉄道駅開業に向けて～

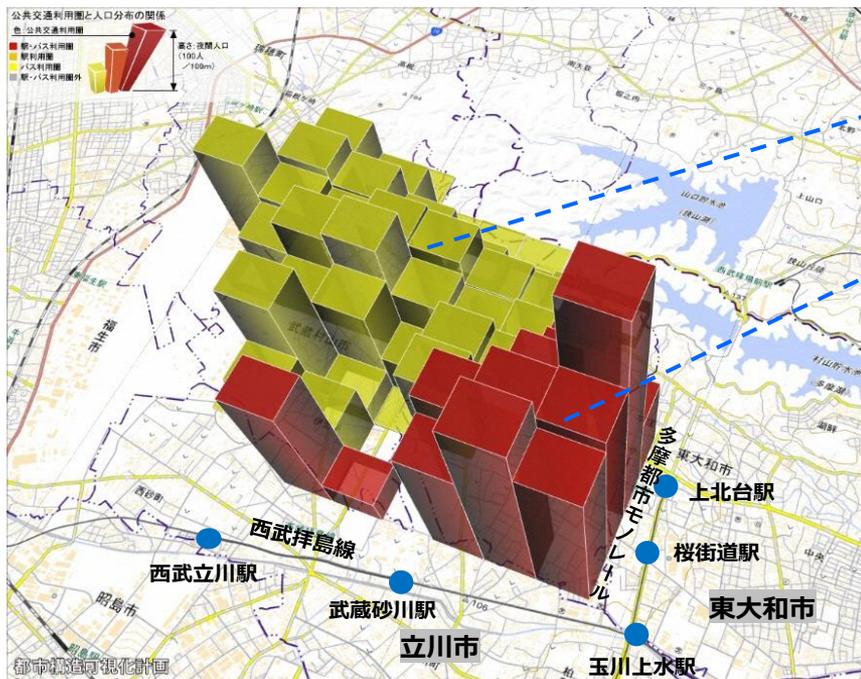


武蔵村山市都市計画課

1. 武蔵村山市のまちづくり

◆ 東京都内で唯一鉄道が通っていない市。多摩都市モノレール延伸を見据えたまちづくりを進めている。

＜公共交通利用圏と人口分布の関係＞



補注：都市構造可視化計画、地理院地図を使用

市域の半分以上はバス利用圏

南部、南東部は駅が近いため、駅・バス利用圏

＜多摩都市モノレール延伸計画＞



補注：都市計画案説明会資料を使用

2030年代半ばの多摩都市モノレール延伸を見据えたまちづくりを進行中。

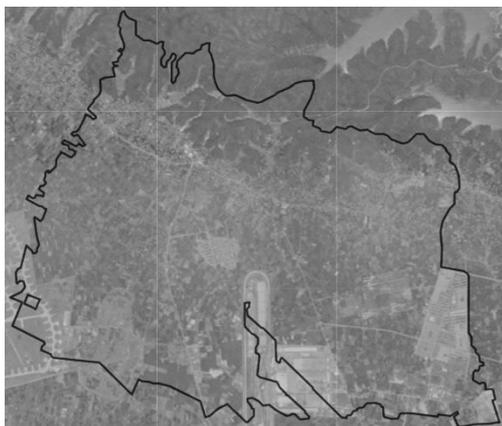
- 市民ワークショップ等による駅周辺まちづくりの検討
- 沿線の用途地域変更や地区計画策定
- 立地適正化計画の策定

2.可視化の目的

- ◆ 過去のまちの転換期の可視化、今回の転換期で起こりうる課題の可視化により、市内でのまちづくりの分析、検討や、市民が関心を持つきっかけとなるツールにしたい。

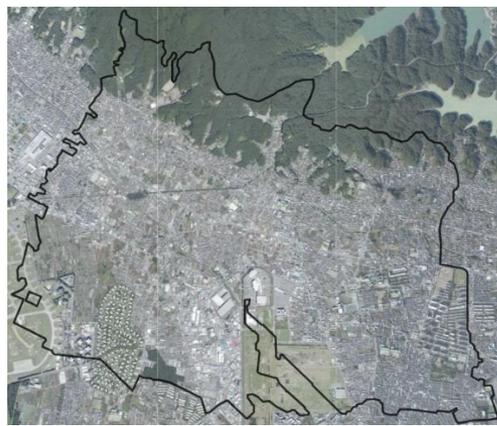
1960年代
(昭和30~40年代)

大規模自動車工場の開設とそれに伴う幹線道路や住宅の整備



2000年前後
(平成10年代)

大規模自動車工場の撤退とそれに伴う跡地の土地利用転換



補注：航空写真は地理院地図を使用

2020年代~
(令和1年代~)

鉄道駅設置に伴う沿線の変化

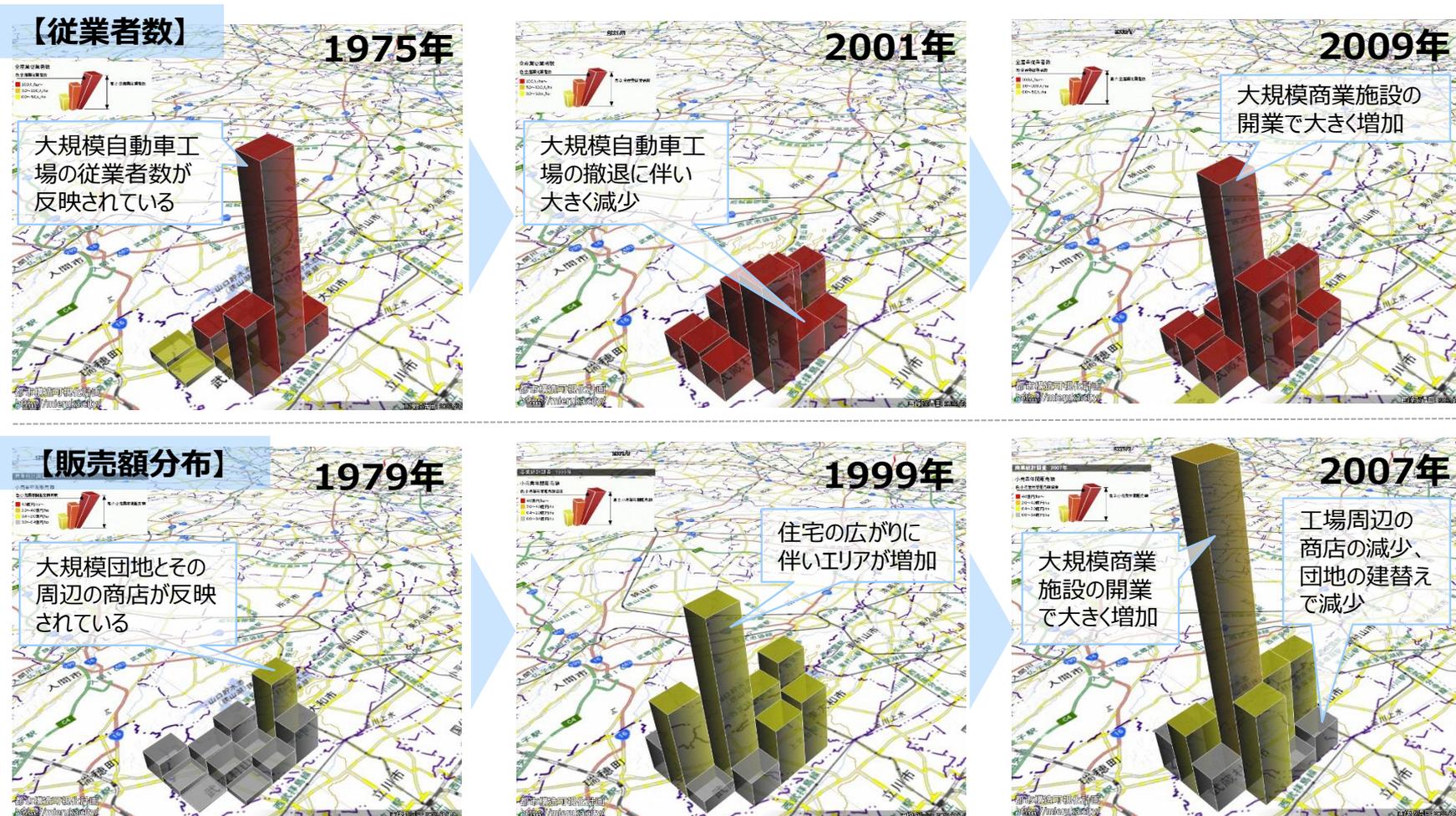


今後の変化で起こる課題が見えてこないか？

これまでの転換期において顕著にデータに表れている変化はないか？

3.過去：可視化サイトで見る経年変化

- ◆ 従業者数、販売額分布ともに、大規模自動車工場の閉鎖と、その跡地での大規模商業施設の開業に伴い、大きく増減が見られる。

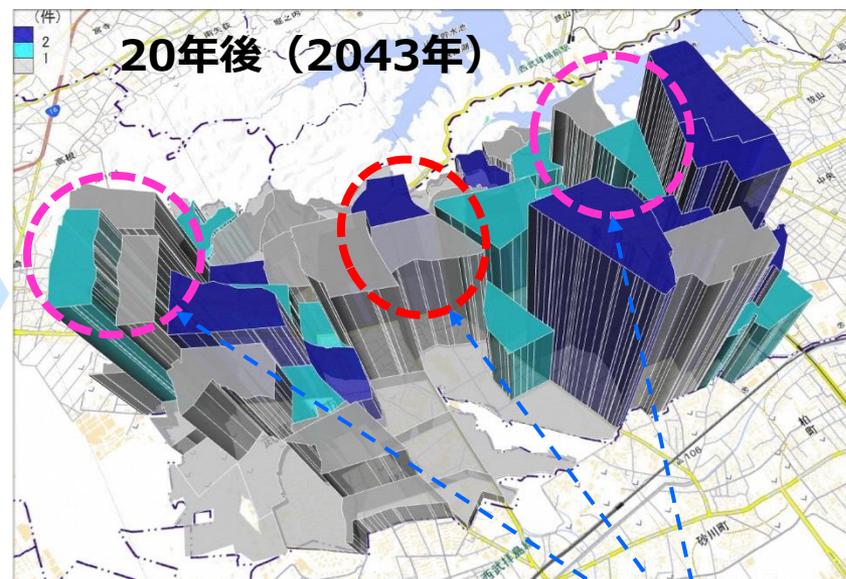
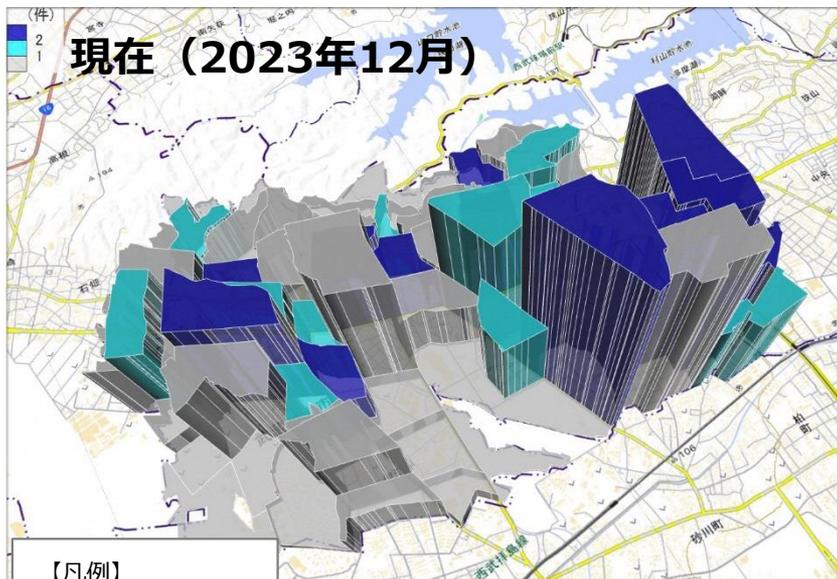


補注：都市構造可視化計画、地理院地図を使用

4.未来：人口増加をシミュレーション

- ◆ 町丁別人口と公共施設数を可視化。20年後の1万人の人口増加をシミュレーションすると、駅予定地周辺で公共施設が不足する課題が見えてくる。

補注：都市構造可視化計画、地理院地図を使用



【凡例】
高さ：人口
色：公共施設数

- 2件以上
- 1件
- 0件

※公共施設は、市役所、出張所、センター、市民会館、公民館、地区会館、集会所、図書館、福祉会館、児童館、小中学校を採用

- 都市計画マスタープランにおいて、1万人の人口増加を掲げている。
- 1万人の人口を、“都市核” “サブ核”と位置付けている3つの駅予定地周辺に分配。

※将来推計人口によるものではなく、1,250人を8町丁に加算（ $1,250 \times 8 = 10,000$ ）し、シミュレーションしたもの。その他町丁は人口維持の想定。

- 人口は増加しても、公共施設が不足する地区が浮き出てくる。
- このような見えてきた課題は、課内に共有するとともに、立地適正化計画等で都市機能の集積、公共施設集約を検討していく上での材料にしたい。

6.現場での活用と考察

【現場での活用】

- 可視化サイトで見られた変化点や、シミュレーションで得られた課題を課内で共有した。
- 今後、広く活用していくためには何が必要かを議論した。

【今後の展望】

- 課内のほか庁内での活用場面を模索する。
- 市民への公表や説明の場面で活用する。

【可視化の効果】

- 身近な統計データでも可視化が可能。
- グラフや表で表すよりも、伝わりやすく、直感的にイメージがしやすい。

【課題】

- PC・ネットワーク環境
 - 業務用PCではGISソフトやGoogle Earthがダウンロードできないため、業務中に気軽に使うことができない。PCのスペック、周辺機器などハード面の環境整備が必要。
- 人材育成
 - GISを理解、習得しており、指導ができる職員の育成が必要。GIS、Shapeという言葉は分かるが、なんとなく難しいイメージがあり、その打開により、まずは触れてもらう機会の創出が必要。
- データ整備
 - 庁内に使えるデータを所有していない。オープンデータの不足、未更新。





武蔵村山市

